
落ちこぼれなんていわせない！

水城 紗羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落ちこぼれなんていわせない！

【Nコード】

N5231J

【作者名】

水城 紗羅

【あらすじ】

落ちこぼれの廉ちゃんこと、長谷部 廉はテストでは赤点を取ったりするなど落ちこぼれ生活を送っていた。

そのうえ、本人もそんな自分を『しょうがない』の一言で諦める始末。

しかし、廉がいつもどおり授業中に居眠りしていると、変な少年が夢の中に現れ……！？

ブローグ

人は俺のことをこう呼ぶ。

『落ちこぼれの廉ちゃん』

それは事実だし嘘偽りじゃないから、俺自身、否定してはいないけど。

例えば、テストで赤点とった時もこんな感じだった。

「次頑張ろう！」

テストの点数はいつもと同じ一桁だった。

けれど俺はその一言でよしとしてしまい、いつも結果はボロボロ。

どう見ても真面目に取り組まない自分が悪いと、周りの人に思われ
ても当然。

だから、落ちこぼれだのなんだの言われても気にはしてなかったし、
逆にそういわれてた方が気楽だと開き直ってたくらいだった。

そんな俺が、いつもと同じように数学の授業中、先生に目が付けられ
にくい後ろの方の席で居眠りしていた時だった。

変な夢を見た。

居眠りをしてるときでも、たまに夢を見ることはあった。

だけど、今日の夢はいつもと違った。

その夢には、明らかにいつもと違う違和感があった。

夢の中のはずなのに、妙に世界がリアルだった。

足元を見てみると、自分の居る場所が分かった。

足元には、レンガで雑に造ったような人一人通るのがやつとというくらいの、細くて小さな橋があった。

適当に造ったのかどうかは分からなかったけど、足元の橋に使われているレンガたちには隙間があった。

そして、そこからは橋の下の景色を見ることができた。

辺りを見回してみると、近くにレンガ造りの家が並んでいて、辺りに人気はなく、例えるなら、俺は一人ポツリと残されてしまった……そんな感じだった。

今度は橋の欄干に手を置き橋の下を見てみると、川が流れているのが見えた。

川の色は澄んだ水色をしていて、綺麗に見えた。

耳を澄ますと、川のせせらぎが聞こえた。

それは、夢の中でありえることなのか……？

俺は本当に夢の中に居るのか？

此処は現実じゃないのか…？

ふと、俺の中で疑問が湧き上がって来た。

俺はその疑問の答えが出ず、自分が見ている光景を不思議に思いながら、瞬きをした。

けれど、そこにはさつきとなにも変わらない光景が広がっていた。

この世界で、俺は自分の意思で動いて、行動する事ができる。

頭の悪い俺でも、それくらいのことはわかった様な気がした。

川を見続けていると、今度はそこから白色に光り輝く物が見えた。

「なんだ？」

俺は不思議の思っで、ジッと目を凝らすと、そいつと目が合った。

「……ひとおっ！！？」

俺は少しの間“そいつ”のことについて考えていると、目の前に居るのが自分と同じ動物…つまりは人間だということに目を疑った。

「やっと来たか。」

俺が橋から身を乗り出してそいつを見ていると、奴は俺を見てニヤリと笑った。

「は…?」

“ やつと ” と “ 来た ” という二つの言葉に首をかしげていると、奴そいつは独りでに話し始めた。

「 待っていたぞ、小僧。 いやぁ… しかし、まさか百年経つてめぐり合えるとは。 まぁ、それほどの逸材ということなのか？ とにかく小僧… おぬしの力、とくと見せてもらおう。 」

そいつの見た目は少年。

そのせいか、言葉遣いとのギャップに凄い差を感じる。

しかも、俺が居た時代でいうと、何百年… 何千年前？ と、思わず聞きたくなる様な時代遅れな服装をしていた。

歴史の授業とかで見たことのある服装だった。

授業に集中して取り組んでないから、何時代かは思い出せなかったけど。

「 … つーか、あんた誰？ 何者？ 突然現れて意味不明なこと聞かされても困るんですけどー! ? 」

俺は川の上に浮いている少年に向けて、叫んだ。

「 人のことを聞く前に自分から名乗るのが礼儀だぞ、小僧。 」

すると、こんな言葉が返ってきたので、思わず笑ってしまった。

「どう見てもお前のがガキだろ。俺より幾つ下だと思って…」

「それはこっちの台詞じゃ。おぬしよりわしの方が幾つ年上だと思っ
っている?」

俺はその言葉に耳を疑った。

「いやいや、いくら子供でも冗談はいけないだろ。身長だって俺より低いし、どう見たって俺より年下じゃん?」

「…冗談? ふざけるな!! わしの名前は、ミコト。今年で百七歳じゃ!!」

「えっ…百七? ってことは…俺より…」

指を折って俺との年の差を数えていくと、

「九十歳年上えっ!!?」

九十歳年上だということが分かった。

「なんで生きてるんだよ!? どうしてそんな若々しいんだよ!!
!?!」

俺を見ながら率直な疑問を投げかけると、

「この容姿の時、亡くなったからじゃ。さっき言っただろう?...?
百年待ったと。」

「そういえば、そういつてた気も……っで、そうじゃなくて!!
なんであんたが俺の夢の中に化けて出て来るんだよ!？」

そっいつて、俺はミコトと名乗った見た目少年な奴を見た。

すると、奴は口角を上げ、不気味な微笑みを作ってこういいやがつた。

「おぬしの力が必要だから。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5231j/>

落ちこぼれなんていわせない！

2010年10月9日07時32分発行